

講演要旨

マレーシアにおけるイスラーム教徒と仏教徒 ～日本における共生の視座～

上智大学准教授
久志本 裕子

本講演の目的は東南アジアのマレーシアでイスラームと仏教がどのように社会の中に位置づき、それぞれの信徒がどのように隣あって共に暮らしているのかを考察することを通じて、日本で様々な宗教の人々が共生していく可能性を考えることである。本講演ではまずマレーシアの社会の特徴、歴史的背景からそれぞれの宗教の位置づけを説明し、マレーシアの日常の風景の中でそれぞれの宗教がどのように実践されているのかを紹介する。そのうえで、イスラームと仏教、およびそれぞれの信徒がどのような形で「共生」しているのか、そこから日本社会における共生をどのように考える可能性が拓けるかについて論じたい。

マレーシアはイスラームを国教とする多民族・多宗教国家である。マレーシアの人口約3245万人の宗教別内訳はイスラーム63.5%、仏教18.7%、キリスト教9.1%、ヒンドゥー教6.1%、その他であり、仏教は二番目に人数が多い。一方、民族別の人口構成を見ると、ブミプトラ（マレー人と先住諸民族）69.4%、華人23.2%、インド系6.7%、その他となっている。華人、インド系の人々の多くは、イギリスが植民地統治をしていた時代に中国、インドの各地から移民してきた人々の子孫であり、仏教を信仰しているのは主にこの中国にルーツを持つ華人である。現在のマレーシアの仏教の多数派は中国からの移民によって持ち込まれた大乘仏教であるが、マレー半島北部などにはタイ系の人々を中心とする上座部仏教も信仰されている。また、歴史をたどると仏教は15世紀前後にイスラーム化が進む以前、インドの文明の影響を受けてヒンドゥー的信仰と共にマレー人の祖先によって信仰されていた宗教でもあった。マレーシアは、歴史を通じて様々な宗教が共存する社会であった。

現代のマレーシアの国の制度の中では、国教・多数派のイスラームと、非国教・少数派ではあるが第二の規模を持つ仏教は対等に扱われているとはいえない。イスラームは明らかに優遇されており、他の宗教の信仰・実践の自由は憲法にも明記されているものの、常に政府や社会の反応を考慮することが求められる。近年では、宗教的感情をあおることで政治的に利用する動きも目立つ。こうした決して「みんな仲良し」ではないマレーシアではあるが、これまでに大規模な「宗教紛争」に相当する事件は起こったことがない。マレーシアが興味深いのは、宗教的アイデンティティを多くの人が誰にでも見える形で明示し、お互いの間の宗教的な線引きを明確にしながら断絶することはなく、対立を巧みに避けながら関係性を保つ技が個人から社会まで様々な場面に埋め込まれているところであろう。このような社会の例から、宗教の違いを「乗り越える」というよりも、あたりまえに存在するものとして受け止める可能性を考えていけるのではないだろうか。

以上